

博士論文 概要書

氏名 兼田 麗子

1. 問題意識と目的

1980年代のいわゆるバブル経済以降の深刻な不況の影響もあって、構造改革と民間活力が重視され、自由、競争に基づく効率性・市場原理の重要性が再確認されている。自己責任や自助努力がこれまで以上に強調されている感もある。市場原理の追求は、人間活動の効率化や活性化にとってももちろん不可欠なものである。しかし、我々のより良い暮らしのためには、経済効率と同様に、協同・共存についても再認識の必要があることは指摘されてきた。

現在、生活スタイルや人々の意識、及び社会構造の変化によって少子高齢社会化が進んでおり、労働力、年金といった経済・社会・福祉の問題は一般的にとっても大きな不安材料となっている。より良い暮らしを求めてのニーズは多様化・増加する一方で、もはや、それらへの対応を一極集中的に国に期待すること、或いは国をはじめとする公的機関に依存するのみの福祉政策には無理があるのではないかと考えられるようになってきた。このような状況下で、自助の精神を持ちながら、国や自治体の限界にも対応しようとする非営利団体(NPO)や互助の活動が活発化し、クローズアップされるようになった。我々により近い存在の主体が地域を中心にしてリーダーシップを発揮していく重要性がこれまで以上に強く認識され始めている。

私は、修士課程では、フィランソロピー(社会貢献)精神を基礎に持つNPOをテーマに選択して、日本のNPOの現状と問題点を他国との比較も含めて整理した。そして、高齢者福祉分野のNPOを事例にとり、NPOが公共分野の「下」からの担い手として発展を遂げて、人々の期待に応えていくにはどのような役割を担っていけば良いのかを考察するためにアンケート調査を行った。その結果として、私は、高齢者福祉分野に於けるNPOには、国や自治体、及び営利企業とは異なる役割分担の可能性が存在すること、そしてそれが期待されていることを確認した。また、NPOのみで現実問題の実際的解決にあたることは難しく、政府などの「官」とNPOなどの「民」が連携していくことが重要であることも再認識した。

その後、博士課程で私は、NPOとそれに関連する現代の福祉政策を学ぶことを選択せずに、それらを見据えながら、現代社会が抱える問題の処方箋を歴史に求めることにした。歴史研究から出発して、民間活力溢れる市民福祉社会づくりに必要な視点を過去から洞察しようと考えたのであった。

2. 日本近代化の過程

封建時代を終えた日本は、欧米諸国の近代国家という枠組みのみを模倣した形で、中央集権国家を「上」からつくっていった。当時は、現代と同様に、意識や社会構造が変化し、閉

塞感や危機感の充満する変革の時代であった。当然、近代的な個人や市民という意識は人々の間に確立されておらず、政府・官僚主導による「上」からの、という動きが主たるものであった。そのような時代制約の中で、人々のフィランソロピー精神、変革への参加意志と勇氣、行動力、創意工夫の度合いはかなり大きかったと言えるのではないか。明治維新も国の行末を危ぶんだ一種の「下」からの動きだったとも考えられ、近代国家成立以前の日本でも民間活力や果敢な行動力、創意工夫が富んでいたと思われる。現代になって注目を浴びている民間による社会貢献の動きは、日本の歴史上にこれまで存在しなかった新しいことではなく、遡ること 100 年前の 20 世紀初めにも存在したのであった。

従って、私はそのような時代に生き、フィランソロピー精神の下で、自分達のよりよい生活のために問題点を進んで改革しようとした先駆的な社会改良者の思想と実際の活動を現代的意義を求めながら考察することにした。我々が生活する場としてのコミュニティへの貢献可能性について歴史に指針を求めたいと考えたのであった。

3. 実践者、留岡幸助と大原孫三郎

資本主義化による社会構造的な貧富の差が発生し出した明治・大正期には社会貢献を行い、変革や啓蒙に従事した人物は多数存在した。福祉に何らかの役割を果たした人物は少なくないと思われる。しかし、私の力量から考えると、可能な限り少数例に絞って研究することが最善策と思われたため、考察する際に念頭に入れておきたいキーワードを書き出してみた。その結果、フィランソロピー精神、人類愛、キリスト教などにまでつながり得る権威主義的でない公共性 - 江戸時代からの連続性 -、民間人としてのリーダーシップ、体系的な実践、創意工夫、経済や現実に対する合理的視点、個人も重視する姿勢、私益偏重や功利主義的ではない、心・精神・道徳と学術・経済・物質・科学の両立などというものが浮かび上がってきた。また、東アジア的 - 儒教圈的 - な観念に偏重するのではなく、逆に近代欧米的な観念に無批判に追従するのではなく、それら両者を重視し、無意識的にも融合を図ろうとした可能性を持つ人物を考察したいと考えた。このような基準に従って、私は、社会事業家の留岡幸助(1864 - 1934)と実業家の大原孫三郎(1880 - 1943)を選択した。

留岡幸助は、幕末に生まれ、明治、大正、昭和を生きた日本の社会事業の先駆者と目される実践家である。明治維新を経て急速な近代国家づくりへと向かう中で様々な社会的歪みが表面化してきた時代に、多様な人との交流を通じて多岐にわたる活動をした人物である。キリスト教を信仰するようになった幸助は、同志社を卒業後、活けるキリスト教で社会改良へと乗り出した。幸助の最初の本格的な社会実践の場は、教会を拠点に伝道を行った京都の丹波周辺であった。その後、幸助は、以前から心密かに目指していた監獄改良への道を一步踏み出すことができた。幸助は北海道空知集治監の教誨師に就任し、そこで、囚人達の置かれている状況やそれまでの経歴などを見聞する機会を得たのであった。そして、国家が「上」からつくられていた時代で、なお且つ、監獄改良の分野では「官」関係の人達でも海外留学があまり見られなかった頃に、幸助は、一民間人として、海外に於ける監獄状況や動向を研究するために渡米した。明治時代という時代の制約上、情民観や国家主義という側面も幸助

は有していたが、活けるキリスト教で不遇な人たちを照らし、「施し」的な慈善事業から学術を備えた社会事業へと進める必要性をいち早く説いた。また、幸助は、民間人として信念に基づいて感化教育に携わったのみならず、内務省地方局の囑託という「官」の立場からも社会改良を試みた。公的福祉制度としては1874(明治7)年に制定された恤救規則しか存在しなかった頃に幸助は、社会行政の整備も必要であるとの見解を示し、「民」と「官」との連携をいち早く図ろうとした。

もう1人の大原孫三郎は、留岡幸助よりも16年後に、地主と紡績会社の経営を兼ねる資産家に生まれ、青年期に岡山孤児院を運営していた石井十次に感化されてキリスト者となった一地方の実業家であった。大資産家の子供として生まれ、金銭での失敗に直面した孫三郎は、石井十次や聖書、二宮尊徳などから影響を受け、より良い社会づくりのために尽力することが自分の使命であると改心・決心した。その後、孫三郎は、自分が経営を行うようになった倉敷紡績内の改革を人格向上主義という信念に立って断行していった。資本家と労働者の利害の一致の存在を確信していた孫三郎は、地主と小作人、及び富者と貧者との間にも一致点があると考え、小作人や労働者の生活安定のために独自の対策を講じていった。それらが大原農業研究所や大原社会問題研究所、倉敷労働科学研究所、倉敷中央病院などの設立であった。また、孫三郎は、岡山孤児院に対して物心両面での支援を行うと共に、倉敷というコミュニティの人々の啓蒙にも貢献した。当時の知識人を私費で招聘した倉敷日曜講演会は長期にわたって継続された。さらには、優秀な学生や研究者の教育・留学費用の支援も多数行った。大原孫三郎は、頑固な性格などによって生前、誤解される面も多かったようであるが、その支援やリーダーシップは、一概に、資産家だったために可能だったとは言いきれないほど徹底したものであった。

4. 社会事業家と実業家、生年に16年の差がある人物を取り上げた理由

1人ではなく最初から2人を考察対象に取り上げたことには理由があった。可能な限り多くの社会改良例に目を向ければ、時代性や日本における福祉や公共に関する状況変化の過程を考察することができるかと期待したからである。しかし、私の力量からいって多数例を考察することには無理がある。そこで、2人を例にとって研究を進めることにしたのであった。それでは、なぜ同じような範疇でくれる2人を選択しなかったのか、というと、前述した私の課題を繰り返すと、自分達の問題を自分達自身のものとして受け止め、「民」の立場から改善に積極的に寄与しようとした動きの考察である。「民」とは、キリスト教の隣人愛に基づいて弱者救済活動を積極的に行った幸助などの社会事業家達ばかりではない。「民」の中のそのような人達ばかりが社会実践を積極的に果たしたのではなかった。ステレオタイプ的に型にはめて社会実践をとらえなくなかったため、全くタイプの異なる2人、それも並行的に研究されることのほとんどない留岡幸助と大原孫三郎を選択した。

さらに、取り上げた2人の生年には16年のずれがある。渋沢や福沢などの「天保の老人」に近い留岡幸助と「明治の新青年」に属す大原孫三郎を考察することによって、近代日本の形成過程、及び社会改良の思想の変化を浮き立たせることができるのではないかと考え、少

し時代がずれた人物を取り上げた。

5. 構成

本論文は、留岡幸助を扱った第一部と大原孫三郎についての第二部から成っている。第一部の第1章と第2章では、幸助の経歴、民間人として創設した感化学校での実践活動とその背後にあった思想についてまとめた。第3章では、報徳思想を手段として、幸助が内務省囑託の地位で携わった地方改良運動の有意性の考察を試みた。第4章では、社会事業経験の集大成として幸助が創設した北海道家庭学校と新農村での実践をロバート・オウエンの実践とも比較しながらその有意性を考察した。第5章では、人権観念の欠如が批判されることを鑑みて幸助の人間観に目を向けた。そして、第二部の付論として、行刑制度分野でも活動した幸助と法律関係者達との交流について簡単にまとめてみた。尚、留岡幸助については、石井十次研究と同様、個別的な教育・施設面などの研究が意欲的に行われているが、私は、日本の社会思想史の研究の歩みの中で幸助を扱おうとしたので、そのような詳細な施設史などには踏み込まなかった。

次に、大原孫三郎について記した第二部では、初めの第6章で、孫三郎の生きた時代、及び孫三郎の経歴と思想形成過程についてふれた。第7章と第8章では、孫三郎の倉敷紡績内での改革や大原農業研究所、大原社会問題研究所、倉敷労働科学研究所の設立に関して取り上げた。第9章、第10章、第11章では、各々、鐘紡の経営者、武藤山治と「財界の大物」ながらも社会事業に多数関わった渋沢栄一を取り上げ、孫三郎と比較検討を行った。さらに第12章では、孫三郎が行った柳宗悦などへの支援と孫三郎の背後にあった故郷の風土からの影響に関して考察した。そして第二部でも付論として、第12章と関連付けることを目的として、孫三郎に大きな影響を与えた石井十次の思想形成についてまとめてみた。

2003年10月に、留岡幸助と大原孫三郎を考察した『福祉実践にかけた先駆者たち - 留岡幸助と大原孫三郎』を出版し、その後、不足な点などについて様々な評やアドバイスを得た。また、時間の経過と研究の続行により、考え直したり、再認識する点なども出てきた。それらを基にして、色々書き足してみたこと 新たに行った必須概念の整理、留岡幸助と大原孫三郎について、また両者から学んだこと を終章では記述した。これまで、考察事例に目を向ける場合、可能な限り事実をみるべく、実証科学的ということを考えてまとめたつもりであるが、結びの代わりとしてまとめた終章では、私なりの意見を多数入れて記述してみた。全13章プラス付論2つから成る本論文は、社会事業の先駆者たる留岡幸助と実業家の大原孫三郎という一見かけはなれた人物を取り上げはしたが、両者の人類愛や使命感につながったと思われるキリスト教、伝統的な儒教的・報徳思想的考え方、オウエンとの対比などという共通の基軸 東アジア的なものと近代欧米的なもの をもって一貫して考察することに注意を払った。その一方で、その基軸を念頭に置きながらも、考察するテーマや分野は、社会事業家と実業家という両者の相違を浮き立たせるものを選択したつもりである。

6. 考察を終えて

私は、留岡幸助と大原孫三郎の人道・博愛主義に基づいた率先的な実践の研究を通じて、社会構造の変化に対しては、国や地方自治体のみが改革に当たるばかりではなく、民間人も意識改革や努力を行い、リーダーシップを発揮しながら対応していく必要があることを改めて強く感じた。幸助も孫三郎も、個人の人格の確立と独立自営の精神をことさら重視すると共に、人間愛、共存・公共・フィランソロピー精神に基づいて行動した。両者は、儒教精神を引き継ぎ、そしてキリスト教にも感化を受けた人物であった。言わば、儒教圏的側面と近代欧米思想からの影響を融合させた特徴を有していたのであった。それらが現代の我々に語りかけるものは多いと考え、2人の人道・博愛主義に基づいた率先的な実践から学んだ点を私なりに整理した。私の研究のほんの始まりでしかない。そこでは、到底着手することはできなかった研究課題も見えてきた。それら キリスト教などまでにつながり得る権威主義的ではない儒教の中の公共性や東アジアとの関連性など については、今後、徐々に扱っていきたいと考えているところである。